シルクカントリー 絹の国ふるさと祭り・in甘楽

外国人モニタリングツアー
「製糸場とPRを」
11カ国20人

「外国人が見た甘楽町と絹遺産」について意見交換する参加者

本県の絹産業とその隆盛を支えた「かかあ天下」の魅力を磨こうと、外国人の目線で町の良さを探るモニタリングツアーが、「お休み処（どころ）信州屋」を主会場に行われた。11カ国の男女20人が浴衣姿で茶道を体験したり、群馬の伝統食を味わい、感想を語り合った。

参加した外国人は、来日中の国際協力機構（JICA）の研修員15人と、外国語指導助手（ALT）として県内に勤める5人。NPO法人自然塾寺子屋（同町上野）の森栄梨子さんらが案内した。

一行は国名勝「楽山園」で、清水千鶴さんや吉田信子さんら地元有志に浴衣を着付けてもらい、園内を散策。黒沢千恵子さんらによる茶道のもてなしにも興味津々だった。

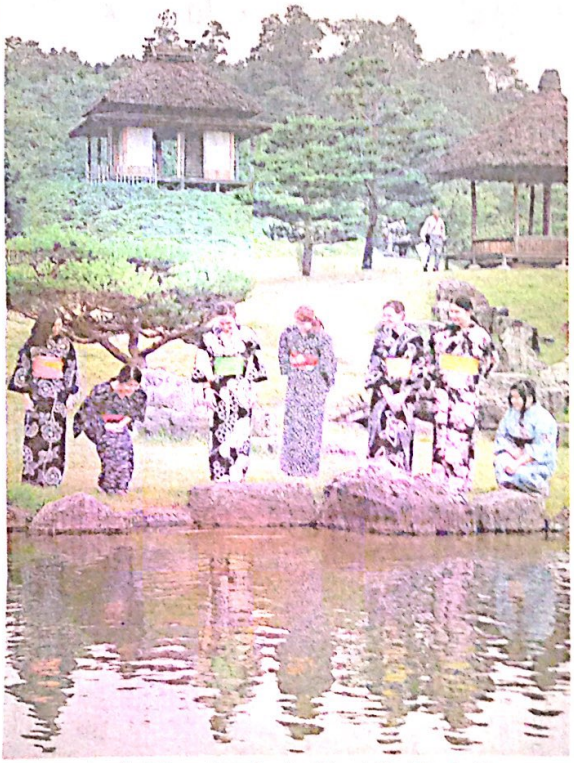
雨の中を歩いて信州屋に戻り、地元女性グループ「ひまわり」の峰岸靖子さんらが用意したトマト入りのすいとんで体を温めた。桑の実ジャムを付けたおやきも味わった。

取りまとめセッション「外国人が見た甘楽町と絹遺産」では、ツアーに同行した高崎経済大などの学生9人が、外国人から聞いた意見を発表した。芝浦工業大大学院の河野文昭さんは「町は魅力があり、もっと知名度が高くていい」と今後の発展に期待した。

ALT5人も休験の要素や交通案内の充実を求めた。クリスティン・ウィルソンさんは「女性たちが地域を支えたかかあ天下は本当に素晴らしい。富岡製糸場と組み合わせ、もっとアピールすべきだ」と応援した。

JICA職員の山下尚久さんは「英語以外の話者にも対応を広げてほしい」と提言。県立女子大の小林良江教授は、現代の女性が幸福感を持って暮らすため、風情ある街並みや今回のように多様な人が集まる機会を守るよう勧めた。

藤井浩・上毛新聞社論説委員長は「かめばかむほど味が出る町。何度も訪れてほしい」と話し、茂原荘一町長は「皆さんの意見を基に、住民が誇りを持てるまちづくりを進めたい」と応じた。


楽山園で浴衣を着て散策するモニタリングツアーの参加者

Scanned by CamScanner